〔翻訳〕

『ポーランド農民』の共著者としてのズナニエツキ

シグムント・ドルチェフスキー＊ 著
佐藤　嘉一＊＊訳

訳者解説

もう20年も前になる。訳者は在外研修の目的でビーレフェルト大学客員研究員（Gastforscher）として1989年８月末から約１年間ドイツに滞在した。「ベルリンの壁」が崩壊し，東西ドイツの統一が実現された時期にあたる。これに連鎖反応するかのようにポーランドをはじめとするチェコスロバキア，ハンガリー，ルーマニア，ユーゴスラビア，ブルガリアなど東欧諸国にも「民主化」運動が広がり，ゴルバチョフの「ペレストロイカ」政策のなかでドイツを中心に東ヨーロッパ諸国も大激変の時代であった。その激動の時代に訳者はアメリカに亡命した現象学的社会学の創始者アルフレド・シュッツの研究のためにシュッツ研究家のグラートホフ（Richard Grathoff）教授の研究室をたよってドイツにたまたま出向いたのである。この研究室で目にしたのは，Elizabeth Suzanne Kassab（現エール大学教授）や Steven Vaitkus（現マリアンネ・ウェーバー研究所員），それに韓国や中国からの研究者にまじって，ポーランドやブルガリャからやってきた社会学者たちであった。ここに翻訳して紹介を試みる論文［註１の６.］の執筆者，ジグムント・ドルチェフスキー（Zygmunt Dulczewski）はポーランドの Adam Mickiewicz 大学（ポズナニ）社会学研究所教授（1990年現在）であり，グラートホフ教授と共にビーレフェルト大学「フロリアン・ズナニエツキ叢書」の主宰者の一人である。残念ながらドイツ滞在中訳者は著者と直接面識する機会がなかった。この「フロリアン・ズナニエツキ叢書」に収められた論文（19編[註1]）は，すべて A4 版のわら半紙両面40-50行にタイプ印刷され，論文左側の頭部が一か所ホジキスで綴じられている，きわめて簡素なものである。グラートホフ研究室から訳者がドイツ土産に持参した諸資料のなかの一つである。昨年暮れ，宝月誠・中野正大両教授の主宰する「シカゴ社会学研究会」で，以下に掲載するドルチェスキー論文を翻訳して報告したが，「社会学説の秘話」として大変興味深い文献だとの声もあった。今日，ウィリアム・I・トマスとフロリアン・ズナニエツキ著『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』はアメリカ社会学史の古典中の古典と呼ばれる，生活史研究の優れた業績として知られる。この古典的名著の誕生に関して，これまでアメリカのトマス側の情報がもっぱらであり，ズナニエツキ側からの情報は乏しかった。ドルチェフスキー論文は「一読して従来の社会学史的常識を打ち破る面白さ」（Ｓ氏評）があるかもしれない。なおズナニエツキに関連する著

＊元アダム・ミキーヴィッチ大学教授（ポズナニ）
＊＊立命館大学名誉教授

書としてZygmunt Dulczwewski (1992), *Florian Znaniecki: Life and Work,* Poznan［IBN-13:978-8385060369］がある。

Ⅰ　序

『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』という標題の著作は最初ボストンから六十数年前に，英語で第一巻と第二巻（1918年），第三巻（1919年），そして第四巻と第五巻（1920年）がそれぞれ刊行された。はじめこれはシカゴ大学出版局から出版される予定であった。就中，著者はこの出版社と契約を取り交わしていたし，初めの二巻は，この印刷所ですでに植字されていた。その上装丁もクロース製，緑色，シカゴ大学のロゴマーク付であった。

FBIがウィリアム・I・トマス（William I. Thomas）を相手取って起訴し，シカゴ大学からトマスを解雇する結果となった捜査手続により，シカゴ大学出版局はこの出版契約を破棄して，大学出版局はボストンのベジャー出版社（R. G. Badger）にその印刷物および最初の二巻の製本（表紙）を売却した。

この新しい出版社はある特殊加刷により，シカゴ大学出版局のロゴマークを取り除いて，その上にこの出版社の商標のついたタイトルページ（扉）を貼り付けた。その他の第三巻，第四巻と第五巻はこの出版社から出版された。各巻とも同じサイズの判型と同色の表紙であった。この出版の詳細を私に気づかせたのはイリノイ大学のハレット（J. Hullett）教授であった。ハレット教授はズナニエツキ[註2]の友人であり，1946年（戦後）から彼の大学の同僚であり，この出版社を取りかえた操作の跡がある，この作品の初版本を私に贈って下さったのである。

ついでながら，これはトマスにとって彼の裁判審理の結果生じた，唯一の不愉快な事柄ではなかった。例えば *Old World Traits Transplanted* というタイトルの，トマスによって印刷が準備された本は，彼の名前では出版されなかった。それはパークとミラーズ（R. E. Park, H. A. Millers）の著作として1921年ニューヨークで出版された。長年トマスは何の大学のポストも授けられなかった。Helena Zunaniecka-Lopata女史，博学のフロリアン・ズナエツキの娘，彼女は当時シカゴにあるロヨラ大学教授であり，そのヘレナ女史の話で私は知ったのであるが，国の機関や大学の機関のW. I. トマスその他との接し方がとりわけ当時のアメリカの精神生活に関するズナニエツキの批判的見解にある影響を及ぼしたのであった。ズナニエツキはこれについて1919年の彼の自伝的言説の中で述べている（Vgl., *Kultura i Społeczeństwo* No 4 1978）。

初版本はこのように大変多くの困難と妨害に出会ったのであるが，『ポーランド農民』の成功は，しかしこのことについて触れず仕舞いであった。出版六十年目に多くの新版や翻訳が記録されたという事実は，最もよくこのことを示している。合衆国の英語版での三つの新版，イタリア語版（ミラノ，1968），ポーランド語版（ワルシャワ，1976），日本語版の予告。この疑うべからざる出版上の成功は，それ故，この作品が学問における優れた地位，社会学の代表作という特別の承認を得たことに無論由来する。というのもこの作品は社会研究の方法論にとって決定的な意義があること，また比類ない，科学的価値のある古典的作品であること，これがもう確定的見解となっているからである。

この作品の異例とも言える学問上の地位は，

過去においても，就中，USAの社会学者たちの間では，その学問上の創造的企画ならびに編集上の企画全体の実現にあたり，二人の共著者の分担如何という問いを惹き起した。作品『ポーランド農民』の共同研究以前の時代における二人の研究者の異なる種類の学問業績と違った伝記や違った関心という観点から，このような問いは十分に正当な問いかけであった，もちろん同時にかなり恣意的で，しばしばファンタスティックな推測をも引き起こした。

本稿では私は何よりもまず今日もっぱら可能である限りにおいて，この問題の全体にわたって記述し説明したいと思う。その際，私はUSA滞在期間中（1978年５月から８月）に発見したところの，多数の，全く知られていない，従来未公開資料にまで遡ることができる。

記録文書は「フロリアン・ズナニエツキ私文書保管所 Privatarchiv Florian Znanieckis」からのものである。この記録文書は現在彼の令嬢ヘレナ・ズナニエツカ・ロパタの手元にある。これに加えて，ワルシャワの「新（公）文書保管所」Archiv der Neuen Akten，クラカウのヤギーロンスキー大学の文書資料館，ポズナニのアダム・ミキーヴィッチ大学の文書資料室，ポーランドその他のフロリアン・ズナニエツキの教え子たちからの私的な集まりからの多数の，これまで利用できなかったポーランド語の記録保管所のものもある。

Ⅱ　ズナニエツキの著作『ポーランド農民』への関心

［1］　ズナニエツキが共同研究に招待される

この考察の根本問題に回答するに先だち，どのようにしてフロリアン・ズナニエツキが1914年合衆国に滞在することになり，トマスの学問研究のパートナーとなるにいたったのかについて説明することが必要であると思う。これについてはズナニエツキ自身による二三の偶然の発言がある。

『知的アメリカ』（*The Atlantic Monthly* 1920年２月号所収）というタイトルの匿名で刊行された彼の「想い出」の中で彼はこう書きとめている。彼がアメリカにやってきたのは，自分が「ポーランドで知り合った，優れたアメリカの社会学者，X教授にとって「ある確かな研究の願ってもないチャンス（エルステ・ベステ）」に気づいたからだ，と（「ズナニエツキの想い出」の翻訳 *Kultura i Społeczeństwo*. No. 4 1978を参照）。ニューヨークから1919年11月20日付のワルシャワ内務省宛の手紙，その中でズナニエツキはポーランドに戻る意志とポーランド建設の協力の意志とを表明した。（彼は，特に，団体役員や高級官吏のための専門高等学校をワルシャワに建設することを提言した），その中で彼は次のように書いた。「私のアメリカ滞在５年半，アメリカに私はシカゴ大学のW・I・トマス教授からの招待（下線の強調は原著者 Z. D）で彼と一緒に著作『ポーランド農民』の研究のために参りましたが，私は社会学を自分の専門にして，私の哲学研究とならんで，長い間取り組みました」（ワルシャワの新文書保管所にある書簡）

1945年２月の英文の経歴書（この時代ズナニエツキはUrbanaのイリノイ大学教授であった）にズナニエツキはこう認めた。「私はいよいよ社会学に関心を向けております。W・I・トマスが1913年にポーランドへやってきた折，私は国外移住に関する若干の社会学的調査研究を行いました。国外移住の状況について私が執筆した報告書は，しかし，戦争の故に刊行されなか

った。私はトマスの資料収集を手伝ったし，また彼の提案も快諾した。即ち，私がシカゴに行って，アメリカの移民たちのヨーロッパの（文化）遺産に関するトマスの研究を手伝うことです。」（この経歴書はヘレナ・ズナニエツカ・ロパタの私的記録文書（シカゴ）の中にある。）

雑誌『社会学と社会調査』（1948・第32巻）に発表した論文William I Thomas as a Collaborator「共著者としてのウィリアム・I・トマス」の中でズナニエツキは書いている。「初めて私がトマスに出会ったのは1913年のワルシャワであった。その時トマスは外国移住援護協会事務所に私を訪ねてきた。私は，彼の手元に合衆国へやってきた様々な移民グループ，ポーランド人，ロシア人，ルーマニア人，チェコ人，ハンガリー人，ユダヤ人など中央ヨーロッパや東ヨーロッパ諸国の文化遺産に関する具体的事実の記録があることに魅力を感じ，興味をおぼえた。これらの移民の大多数は農民層や小市民層に属していたので，トマスは主にこれらの階級に関するデータ，とくに農民の伝統文化やその集団組織の元型（ウアチュウプ）に関するデータを探していた。トマスは，農村と何らかの実際的な結びつきのある，あるいは実際に農村で調査研究を実施したことのある，代表的なポーランド知識人たちを訪問した。農業団体や農業共同組合の理事長。新聞発行者，経済学者や民族誌学者たちであった。このようにして彼はかなりの数の刊行された資料や二，三のモノグラフを収集した。私はトマスにそれまで未刊行であった二三の資料を手渡した。私が以前国外移住に関するモノグラフとして収集したものでる。彼のヨーロッパ旅行の終わり頃には，ポーランドに関する資料をその他のどのエスニックグループに関す資料よりも多く所有していた。そのことは大部分次のことから生じたのである。当時，ポーランドが依然としてロシア，ドイツおよびオーストリーの間に分割されていた時に，ポーランド知識人は異常に強く農民問題に対して関心を示していた。なぜなら誰もがポーランド国民の存亡は主要には全人口の60％を構成している，この農民層次第であることを知っていたからである。私たちの議論の間じゅう，トマスは，是非シカゴにやってきて，資料の翻訳や編集について，場合によっては，もっと多くのポーランドに関する資料の合衆国での収集についても同様に彼を援助してほしいと，私を励ま（エルムーテルン）したのです。

ズナニエツキによる個人報告と並んで，トマスによる合衆国へのズナニエツキの招待を証拠立てる，さらに多くの一致した文書が挙げられる。それらの文書は，さまざまな伝記風の**忘備録**やこの学識者に学問上の称号授与の際に発行された任命証書の中に見出される。

その種の二つの文書をここに引用しよう。

1921年３月15日ポズナニ大学哲学部長からのズナニエツキ宛ての正教授の学術称号授与に関する申請についての伝記にかかわるメモには次のような文言が読みとれる。――「1914年７月にズナニエツキはシカゴ大学のW・I・トマス教授の招待によりアメリカ合衆国へ渡航した。彼と一緒にH・クルヴェール基金により国外移住に関する調査研究のためである。」

ポズナン大学のミハエル・ソベスキー哲学教授が申請に添付した所見の中に私たち次の一文を読むことができる。「大戦勃発直前に，ズナニエツキはシカゴ大学のW・I・トマス氏の招待によりヨーロッパ諸民族に関する社会学的研究の共同研究を目的としてアメリカに渡航した。」（以上の二つの文書はワルシャワの「新書類資料保管室」にある。）

私たちの学識者の合衆国への招待という形式，どちらかといえばこの取るに足りない事柄に，このように大きな注意を払うのは大げさにみえる。そこでこれが決して無意義な理由でないことを説明してみたい。

要するに，これまで引用した記録文書の多くが，ズナニエツキの学問上の業績およびズナニエツキのW・I・トマスとの共同研究についてこれまで論じてきたアメリカの著者たちには近づくことができなかった。基本的にアメリカの著者たちは，ポーランドの文書全体に，ズナニエツキの私的記録文書に保管された多数のアメリカの文書に，同じく大学の公文書保管所にある文書に近づくことができなかった。いずれにせよ，アメリカの著者たちはその努力をしようとしなかったし，細かな個々の部分を確かめようとしなかった。彼らが出版記録を手にしたとすれば，それは大抵，ズナニエツキが1947年にトマスの亡くなった直後に書いた，上述の論文「一共同執筆者としてのウィリアム・I・トマス」に限られたのである。

このような事態が，私たちにとって今日全く馬鹿げていると思える証言についての説明を可能にする。モリス・ジャノヴィツの場合が特にそうである。彼はトマスの研究入門『社会組織と社会的人格』*On Social Organization and Social Personality*（シカゴ1966）の中でこう書いている。

―「1908年から1919年までトマスはH・クルヴァー基金により民族心理学（ラッセンプシコロギー）研究に従事した。それ故にトマスは実に多くのヨーロッパ旅行を行い，また著作『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』が土台となった，非常に多くの資料を集めることができた。この旅行期間中にトマスはズナニエツキと知り合い，ズナニエツキはこの研究の準備のために彼の積極的な共同研究者となったのである。」

そしてさらに――「ポーランド社会の詳しい知識をもち，国外移民援護協会の書記であったズナニエツキは，またポーランド農民の社会生活にありのままの（リアリスティック）理解を示す，ごく僅かな人びとの一人であった。翌年，1914年にポーランド人は新たなドイツの侵略を体験した。ズナニエツキは，わが身の危険から（下線はZ. D）ポーランドを離れ，シカゴに旅立ち，彼はトマスを訪問した。トマスはズナニエツキを一度も招待したことはなかったし，そのように励ます（エルムーテルン）こともなかった。実際トマスは，ズナニエツキのポーランドからの出国についてはズナニツキエが一文無しで彼の家に姿を現すその瞬間までは何も知らなかった。しかしトマスはそれなりの基金を自由に使えたので，彼はズナニエツキを学問上の協力者として雇用することができたのである。ズナニエツキは正式には社会学の専門教育を受けていなかったという事実に照らしてみると，それはその当時の時代にとって思いきった措置であった。最後にトマスはズナニエツキをその刊行した著作の共著者にもしたのであった。」

引用したジャノヴィッチの証言のうち何が真実であり，何が真実でないか？

1．ズナニエツキは―いわゆる突然生じた政治状況の圧力のもとで―ドイツ人たちのポーランドへの侵略後，合衆国へ渡航したというのは本当でない。彼はすでに第一次世界大戦の勃発以前に出発したのである。この点についてはミハエル・ソベスキー教授が特に上に引用した彼の所見の中で，自分はズナニエツキと1914年以前にワルシャワで会ったのだと書いている。

2．トマスによる前もっての招待なしに，ズナ

ニエツキは自分の身の危険を感じてUSAに渡航したというのは本当でない。どこから一体このような推測が生れたのだろうか。彼があてもなくシカゴに降り立ったのは，恐らくズナニエツキの一つの冗談からであった。いや，これはひょっとしてありえたことであったし，またこれはもしかしてズナニエツキがさらにそのように着色したのかもしれない。おそらく，トマスは何時シカゴに着くとの，何の知らせもズナニエツキから受け取っていなかったのだから。すべてこれらの推測は，しかし，トマスがポーランド滞在の折にズナニエツキを合衆国に招待しなかったという結論を下しえない。

３．著作『ポーランド農民』の共同研究というズナニエツキに行った提案が一つのリスクを伴う冒険的な措置であり，それはズナニエツキの「いうところの」社会学的専門訓練の欠落によるものであったというのは本当でない。トマスが1913年のワルシャワでの出会いの期間にズナニエツキについて経験したことは，決してリスクどころか，むしろ反対に，その決断に従うことにトマスはいかなる疑念も抱く必要のない，十分に動機づけられた決断であった。要するに，ズナニエツキが当時トマスとの共同研究の相手として何を意味したかについて，想い起こしてみればよい。とりわけズナニエツキは徹底した哲学の専門訓練をうけた学者であった。彼は三篇の重要な既刊の哲学上の著作を学問的業績として残していたし，H・ベルグソンの『創造的進化』の翻訳者でもあった。これに加えて彼はこの時代にすでに「世界人（ヴェルトメンシ）」であった。スイスとフランスではほぼ四年間の在外研修を行い，多くのヨーロッパ語の知識（フランス語，ドイツ語，英語，イタリア語，ロシア語）を自由に操ることができた。同時に彼は大変な博識のもち主であり，多方面にわたる人文主義的教養を身につけ，ヨーロッパの社会学者の代表的著作に詳しかった。そして最後に―これは少なからず重要であるが―ズナニエツキはポーランド人の国外移民問題の誠実な専門家であった。ワルシャワにおける国外移民援護協会の事務局長として，また隔月刊誌 *Wychodza Polsk*『ポーランド移民』の編集長として，ズナニエツキは具体的な実際的経験を積んでいた。ことに彼は国外移民のテーマに関する貴重な報告書や論文の著者，なかでも季節-外国出稼ぎ人に関する約500頁に及ぶ広範な報告書の著者であり，これを彼はワルシャワの中央農業協会の命によりペテルブルグの帝政ロシア政府のために作成したのであった。これらの事実に鑑みるに，合衆国へのズナニエツキを共同研究のために招待したことは，トマスによる当初からの真面目な根拠のある決断であったし，また事実その事業のために，一人の完璧に身支度されたパートナーを獲得する一つの企てを意味した。

その事柄全体は，以下の点を考慮する場合，決して些細なことでないのは明らかである。これらの事実を知らないということは，この著作全体の成立におけるズナニエツキの役割を評価する場合に，従ってM・ジャノヴィッチの場合にも，同様にその他のアメリカの社会学者の場合にも，決定的であったのである。

［２］ 作品の共著者としてのズナニエツキの貢献

上述のアメリカの社会学者たちはズナニエツキの貢献をどのように記述しているだろうか？大抵はモリス・ジャノロヴィッチがそうしたのと同様である。ジャノヴィッチは，共同研究へのズナニエツキの雇用関係（アンシュテルンク）の性質に関する推測を，この全体の学問企図における彼の役割にも

押し広げて，しかも彼はこう言っている。この著作の基本理念および社会学的「インパルス」，指導的な理論上の諸構想は，その全体の構成と同じように，完全にトマスの功績であり，そしていわゆる「若輩の相棒」であるズナニエツキの貢献は資料の収集，言葉の表現についての方法上の整合性，ならびにポーランド人の民族集団に関する情報について配慮することに限られた，と。

ここに，自分の見解を確実な揺るぎない事実であると確信している，ジャノヴィッチの文言から抜粋した一つの見本（プローベ）がある。

―W・I・トマスの知的生活史の第二部は『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』の著作の時代にあたる。この著作計画のスケールはその当時の時代にとって大きいものであったが，そればかりでなく将来にとっても大きな意義のあるものであった。十年余の長きにわたって合衆国とヨーロッパにおける資料の収集が継続され，2,244頁におよぶ，最終出版の準備が続いた。しかしながら，この研究は専ら純粋に経験的調査（フォルシュング）の企てとして考えられたのではない。最初からトマスは，この研究を彼の基本理念の展開と提示のための手段として取り扱った。なにゆえにトマスはこの研究のためにポーランド人を選んだのだろうか。多くの理由がある。ポーランド人はシカゴ南部の最大の民族集団（エスニック・グループ）であり，それ故最大に注目すべき民族集団であった。そして数量的に瑣末な問題を扱うことはトマスのやり方ではなかった。これに加えて，ポーランド人は実際にシカゴにおける一つの「社会問題」を形成していたし，トマスは，その学問的調査研究を彼の社会的関心から決して限界を引かなかった。シカゴや合衆国のその他の地域におけるポーランド人についての大量の資料は，ヨーロッパから得られた少なからざる量の研究成果を補完した。

1913年に彼は，一人のポーランドの哲学者，フロリアン・ズナニエツキに出会った。ズナニエツキは有益な情報源であることが明らかとなり，そして最終的に彼の共同研究者ともなった。彼らのいずれも学問上の共同研究の中で果たす役割についていかなる疑いもなかった。ズナニエツキは経験的資料の熱心な収集家（ザンムラー）であり，ポーランド問題に関して目先の利く優秀な情報家（インフォマトール）でもあった。勿論彼はこの研究チームの若輩の相棒ではあったが，にもかかわらずこの研究への彼の協力は重要な成果をもたらした。

トマスは，ポーランド農民に関する本の著述に着手するに先立って，その基本構想を展開したが，しかし，彼は度々この構想の再定式化に傾いた。これはズナニエツキがシカゴにやって来る前のことであった。ズナニエツキはある強力（スタルク）な哲学上の関心と方法論上の関心を持ち出して，それをこの共同研究の中に導入した。しかしズナニエツキの理論的立場は―この共同研究から解るように―全部を完璧（フォルステントリヒ）に説明しようとする努力を表すものであった。

フォルカート（E・H・Volkart），著書『社会行動と人格』（ニューヨーク 1951）の編集者は，ズナニエツキの役割をさらに一層小さくする方向に進んだ。フォルカートの意図は，トマスの社会科学に対する学問的成果の重要性をはっきり描くことであった。この本はトマスの諸著作の中から諸々の断章を選び収録したものである（その中には『ポーランド農民』からの『方法論ノート』，同様にフォルカートによる序言と注釈が含まれている）。フォルカートはこの著作の中でズナニエツキをトマスの生涯においてなんらかの役割を演じた然るべき人物として述べていない。その本の最後に引き合いにし

たトマスの伝記ノートの中でフォルカートは『ポーランド農民』についての人を惑わす情報を提供している。

―1908年から1918年までトマスは「民族心理学研究へレナ・クルヴェル基金」の管理人（フェルヴァルター）であった。従ってトマスは沢山ヨーロッパ旅行を行い，資料の大部分を収集し，それらに基づいて『ポーランド農民』の労作が成立したのであり，それにこの作品５巻本刊行の草稿をも準備したのである（下線はZ. D）―。

これらの個別の部分をもっと立ち入って説明することは多分意味がない。勿論私が付け加えたいことは，多くのアメリカの社会学者たち―その名前のリストを好きなだけ伸ばすことができる―は，この著作の理論上の基本構想の著作権をトマスに帰していることである。

いかなる重要な結論が引用した証言から明らかとなるか。

1．ズナニエツキには，経験的資料の収集における一人の熱心な援助者であり，ポーランドの民族集団（エスニック・グループ）問題に目先の利く，ポーランドからの国外移住が行われた諸条件についての情報に詳しい，情報提供者であるという地位が授けられる。

2．ズナニエツキは「若輩の相棒」であったが，それは，ジャノヴィッチの文言では，年齢を指すのではなく，共同執筆者としてあまり重要でない役割を指した。彼の見解によれば，この著作の理論上の構想に関する基本部分については，ズナニエツキのシカゴ到着以前の時から，トマスの驚くべき理論能力が決定していた。

3．言葉の表現や仕上げの方法上の整合性についての尽力がズナニエツキの功績であった。そこには，これまでの哲学的一方法論的修業によって支えられた，ズナニエツキの野心が現れていた。

4．トマスが草稿を仕上げて，全５巻を印刷のために用意した（フォーカルト）。

問題を単純化してみると，今や引用した見解の誤りを全部，一つ一つ数え上げることができる。しかし私の意見は，私の結論を支える報告の十分な記録を示すことがいっそう適切ではないかということである。

私たちはそのためにこの点について最も資格のある人物，フロリアン・ズナニツキその人，そしてこの作品が出来上がる全期間彼に協力して働いたアイリン・マークレイ・ズナニエツカ夫人（Eileen Markley Znaniecka）―夫人は形式的にいえばこの研究の秘書として雇用された―，同様に若干のその他のポーランドの情報提供者からの諸々の情報を拠り所にすべきであろう。

ズナニエツキはこの問題に関して二，三の十分明白な証言（アオスザーゲン）をしている。その最初の証言は1919年，従って，この著作の最後の部分がまだ印刷中であった時のものである。それらは，1919年11月20日付のワルシャワ内務省宛ての上記の書簡の中で伝えられた。その書簡の最後の頁で彼は『ポーランド農民』に言及して，こう述べている。「記録の収集（ザンムルンク）という本書の理念とその記録の収集は，主にトマスの仕事です。方法，その資料の分析，そしてその結果の体系的処理は，主に私の仕事です。」

第二の記録文書，即ち，ズナニエツキの論文「共著者としてのW・I・トマス」（上に引用）の中に私たちはつぎの文言が読める。

―1914年９月に私はシカゴに参りました。私は半年の間ウィリアムの助手でした，同時に私は自由

時間には哲学に関する私の仕事を続けました。この時期に，私たちは著書『ポーランド農民』の最初の二巻の主要部分を成している，家族の書簡類を一つにまとめましたが，合衆国におけるポーランド人集団に関するもっと沢山の報告が集められねばならないという自覚が私たちにはありました。これらの集団に関する適切な考察には二三年時間がかかるだろうということも明らかとなりました。このような理由でトマスはこの時点で移民集団に関する彼の研究を先へ進めなかったのです。

初めの計画によれば，この著書は，何よりもまず，若干の説明と注釈の付いた記録資料を含めるはずでした。しかしポーランド農民の文化とポーランド農民の社会組織のテーマについての一般的歴史＝民族誌の導入が必要であると私たちは決断したのです。私は自分の名前でこのような導入を執筆することを提案しました。この執筆を完成した時，トマスは私にこう提案したのです。私はこの全著作の共著者であり，この仕事にできるだけ多くの私の時間と精神力を費やしてほしいと。

私たちの共同作業は異常なほど和やかに経過しました。知的な点でも個人的な領域でも。1916年に，私はアイリン・マーレイ（歴史学修士，法学博士，専門教育を受けた女性秘書）と結婚しました。トマスは彼女をこの著書の印刷準備を支えるために雇用しました。私たちの異なる知的興味が葛藤を惹起したということはありませんでした。私は彼の具体的報告や経験的記録の収集整理癖をいよいよ評価する一方，彼は私の理論化する能力を評価しはじめました。その際，抽象的すぎて，理解困難であるものにだけ彼は留保をつけました。理論は，彼にはむしろ知的手段にすぎませんでした。理論が心理学的諸現象の発見や，分析や，解釈に役立つ場合にのみ，有用だったのです。

私がトマスの態度（attitude）理論と私の価値（value）理論（この価値論を私はずっと以前からポーランド語で書いた著書に文言化しておきましたが）とを総合するという試み―これはしかし完成には到りませんでしたが―を企てた時，トマスはそれを受入れました。私たちがその頃（主にトマスのイニシアチブで）個人の基礎集団（プライマリーグループ）への参加を動機づける「四つの欲動（トリーブ）の理論」を文言化したとき，彼は突然「フロイトの願望（ヴンシ）」―アメリカのフロイトの帰依者たちは［欲動を］願望と当時命名していました―に関心を示しました。リビドーLibidoの語彙を彼は受け入れませんでしたが，彼は私たちの「衝動（アントリーブ）」の語彙を「願望」Wunschに変更し，こうして例の「四つの願望」を不適応人格の分析に用いることになったのです（S. 767）。

第三のズナニエツキの記述は，1951年８月31日付，キンボール・ヤング Kimbal Young ―当時 Evanston（イリノイ州）のノースウエスタン大学社会学部長であった―宛に書かれた，一通の手紙である。『ポーランド農民』の理論前提を含む，有名な「方法論ノート」の著者に関する二人の学者（トマスとズナニエツキ）の執筆分担についての［ヤングの］質問状に対する回答の手紙である。キンボール・ヤングは1951年８月26日付の手紙のなかで，この件について様々なうわさ（レゲンデ）話が流通しているし，ズナニエツキによる一つの説明が絶対に必要であることを確認している。そのことがヤングにとって恐らく特別に重要となった理由は，ヤングはトマスに関するフォルカートの本についての一書評を書いたからである。

キンボール・ヤングはズナニエツキに次の質問を提出した。

１．彼（トマス）は「方法論ノート」を執筆したかどうか？

２．彼は態度の概念と価値の概念の間の関係に関する基本観念を構想したかどうか？

３．彼があのノートを独りで著述したのでなかったとすれば，彼の貢献はどれほどの大きさであったか？

４．トマスが著者である点は何か？

そしてフロリアン・ズナニエツキの回答は以下のとおりである。

—あなたは（友人たちとの非公式な会話を別として）私が『ポーランド農民』の著者かどうかの説明を私から受取るために，直接私に問い合わせてきた最初のひとです。ブルーマーすら例の『批評』を彼が執筆したとき，私と何の接触も取りませんでした。『ポーランド農民』とブルーマーの『批評』の討議が行われた集会のことも私は何も知りませんでした。まったく偶然に私はコロンビア大学に姿をみせたのですが，その時はブルーマーの『批評』はすでに印刷済みでした。ある人物がこの『批評』の二三のコメントを私に願って，その校正ズリを私に示したのです。私はこれ以上個人的な揉め事に関わろうとは思っていなかったし，今も思っていません。もう30年以上も前に書いた著書の私の分担関係の議論についても同じです。けれども「恩給をもらう退職教授」として，あなたの質問に私が正確かつ客観的に回答したとしても，なにかを失うわけでも得をするわけでもありません。トマスと私が私たちの共同の作品として執筆した著書について研究を行っていたということ，これは全く誤解が起こり得ないだろうと私は確信しています。あなたはトマスの初期の諸著作を知っておられます。彼のもともとの未開社会に対する関心や具体的人格に対する関心，彼の「経験主義」，彼の多数の経験的諸事実を科学的一般化のための基礎として不可欠であるという主張，「本能」「衝動」「行動—メカニズム」等のような生物学的概念を文化によって規定される態度概念によって代替すること等。

私の知的生活の歴史は全く別のものでした。しかしこれについてはアメリカの社会科学者や『ポーランド農民』の批評家はなんの関心も示しませんでした。以前私の刊行した論文はポーランド語であったことが，多分その理由らしい。シカゴに参りまして，私は一年間，主に資料の収集，選択そして翻訳にあたりました。当時の計画では，本書（『ポーランド農民』）の内容は，もっぱら秩序立った個人的記録に若干の説明と注釈を付すという構成でした。あなたもよくご存知の通り，これがまさに最初の二巻の第二部の内容です。しかし資料部分があまりにも多く，それらの比較の分析となると，一般的意義をめぐってあまりにも多くの問題を惹き起すことになり，トマスは次第に彼の計画を変更して，結果を整理して，そこから社会学理論のために有意義な貢献を果たすことができ，特に，今日「社会変動の理論」と呼ばれる形式の理論に適うようにとの見解に達したのです。

この時，私は完全に自分の創意により，ポーランド農民共同体の文化遺産に関する一般的考察を含み，主要にはポーランドの民族誌家（エスノグラファー）や若干の歴史家たちに支えられて例の「イントロダクション」を書いたのです。トマスはこの「イントロダクション」を読んだ後，私に共著者として彼と一緒に共同研究に従事する提案をしたのです。従って，問題設定，資料分析ならびに社会学的結論の体系づけについても同じです。そのような共同研究は，当然ながらある共同の問題発見的な手がかりを必要としました。それ故私は彼の「態度」概念から出発する文化現象の彼の見解を「価値」概念が中心にある私自身のアプローチと統合するこ

とを試みたのです。諸個人を社会生活の参加者として研究する彼の方法と，集合体ないし「社会」を考察する方法―これはデユルケム学派によって展開されたのであり，私がパリで学んだのでしたが―この方法とを統合しようと私は試みました。この試みの成果を『方法論ノート』において「私が文言化（フォーミュレーション）」したのです。沢山の議論の後にこれは書かれました。程度はまちまちですが，その他の巻でも同じように彼の構想と私の考えは結びついています。これらの巻は，人間の人格性とその社会生活への参加や社会解体に関係しています。これらは主要にはトマスに由来します。またこれらの巻は，社会組織を扱っていますが，これはほとんどが私の考えです。

キンポール・ヤングの手紙へのフロリアン・ズナニエツキの以上の回答に，アイリン・M・ズナニエツカは―承知の通り，『ポーランド農民』の編集作業の秘書として雇用されたが―簡単な情報を添えた。特に，彼女が書き留めたこと：

―私は，1916年６月から著作が仕上がる，丁度1920年２月まで，休みなく『ポーランド農民』の仕事に関わりました。つまり，私たちが合衆国からポーランドに向け出国したときまでです。シカゴにおけるポーランド人に関する資料収集を手助けする他に，私は全五巻のタイプ原稿を手渡しました。私は貴方に断言できます。全ての原稿はフロリアン・ズナニエツキの手書きで書かれたこと，二，三の注，一定の文章形式，そして文法上の修正，これはトマスの手が加えられたことです。勿論フロリアンは，執筆以前に，また執筆の期間中にトマスと数多くの討議を行い，討議の後彼は一定の部分を書き改めています。私の記憶が正しければ「方法論ノート」Methodological Note を彼は三度書いています。

いま，『ポーランド農民』に関する種々の間違った主張を読みますと，特にその主張がこの問題についてもっとよくご存じでなければならない立場にある方々のものですと，私は何度も抗議を申し上げたい気持に駆られます。しかしフロリアンはそのことについて私を思い留まらせてこう申します。静かに寛いだ生活は威信を守るよりも一層価値があると。やがて社会学者たちはもっと客観的になり，彼の貢献をも承認することを彼は願っています。彼は生来の楽天家でした。私はシカゴへ参れないのが残念です。私はここにとどまり住居を片付けなければなりません。といいますのは Ted Abel が私たちのところに二三日訪ねて参りますので。

アイリン・マークレイは，この他に『ポーランド農民』のテーマに関する報告を含む，十八点の記録文書の一覧表を作成し，その最後に次の言葉を付している。「フロリアンの貢献は特に『ポーランド農民』という著作のポーランドの文化遺産並びに理論装置に関連したものであった。これは彼の哲学的素養に基づいている。『方法論ノート』を誰もが今日現代社会の最大の成果の一つとして評価しますが，これはとりわけフォロリアンの仕事です。（引用したキンボール・ヤングとの往復書簡は，シカゴのヘレナ・ロパタ記録収集文書に見出される）。

上記の記録に照らせば，私たちの問題は完全に解決したように思われる。

１．「方法論ノート Methodological Note」の基礎となる理論的前提が解き明かされた。私たちにわかることは，「方法論ノート」がズナニエツキによって書かれ，トマスとの度重なる討議がもたれたこと，またズナニエツキは理論的に確認したことやトマスの用いた方法と，価値哲

学に基づいて彼が確認したことやデュルケム学派に由来する方法との総合を図ったことである。

２．私たちにわかることは，この著作の第１巻と第２巻のための216頁もの大部の「イントロダクション（Einführung）」がポーランド村落の歴史と民族誌であり，ポーランド村落の最初の社会学概論であるが，これはズナニエツキの主唱（イニシアチブ）ではじまり，最終的にズナニエツキによって著述されたことである。この仕事がズナニエツキをこの全著作の共著者にするというトマスの提案について断を下した。

３．私たちにわかるのは，全５巻の原稿がズナニエツキによって本人直筆で整理されたということである。トマスは，このテキストを読み，論評を付し，文章の形式と文法の修正を施した。二人のパートナーの内容上の共同作業は「討論」によった。「方法論ノート」ならびに第一巻と第二巻の「イントロダクション」が社会学史における本書の地位にとって大変決定的な役割を果たしたという事実に鑑みて，私たちはこの確認で満足してよかろう。しかし本書のその他の部分におけるズナニエツキの貢献に関する情報を含む，その他の資料をも自由に用いることができるのであるから，第三巻，第四巻，第五巻に関する諸記録についても解説を補足しておこう。

ポズナニ大学教授ミハイル・ソベスキーならびにヤン・スタニスラフ・ハイストロンの所見からの情報がそれである。ズナニエツキへの学術称号，正教授の授与申請に際して書かれた所見である（任命はマーシャル・ヨゼフ・ピルスドスキによって署名されている）。

この記録文書から次のことが明らかになる。

１．「ワディスラフ・ヴィシニースキの日記」（ズナニエツキによって英語に翻訳された）を含む，第三巻は，トマスの定式化した「四つの願望説」を考慮して，ズナニエツキによって著述されたイントロダクションによって開始される。このイントロダクションは，社会学における「自伝（オートビオグラフィー）」（自分史）的方法の構想のための理論的基礎を述べており，この構想をズナニエツキはのちにポーランドへ帰国後，彼の研究においてさらに発展させた。

２．著作の第四巻と第五巻は1920年に世に現れたが，ニューヨークで専らズナニエツキによって準備，執筆，そして印刷された。―社会解体の理論を考慮して―トマスによって定式化された理論である。トマスはこれらの巻の編集作業に参加しなかった。この時にはトマスは異なる民族集団の代表者たちの「アメリカ化」に関する著書の印刷準備に特に関心を寄せていた。『移植された旧世界の諸特徴』*Old World Traits Transplanted*，これはその後Ｒ・Ｅ・パークとＨ・Ａ・ミラーの名前で出版された（New York 1921）。

Ⅲ　結論

ズナニエツキの著作全体の成立における分担と役割は，引用した記録文書に照らせば，はっきりと目立っており，なんら不明瞭なところもない。トマスの功績は疑いなく研究の組織化であり，手段と共同研究者の獲得であり，同じく個人の記録文書という形式の原資料の大部分の収集であった。ズナニエツキとの討論のおかげで，トマスは態度の理論，四つの願望の理論，社会的解体の理論ならびに社会的人格の調査方法に関するアメリカ社会学者の初期の科学的査定の仕方を本書の理論的諸前提の中へ取り入れ

ることができた。またトマスは，ズナニエツキが作成した自筆原稿に修正を施し，文章の形式―文法上の改良，テキストや注釈の多くの補正に寄与した。著作の草稿全体の編集は再びズナニエツキの仕事であった。理論上の主要部分は圧倒的に（たとえば「方法論ノート」のように）あるいは専ら（例えば，第一巻と第二巻の「イントロダクション」の場合のように），ズナニツキの考えの豊かさと彼の創造力の賜物であった。

私たちの考慮から得られた結論を定式化することは，この著作の共著者W・I・トマスの意義と役割を貶価することを目的とするのでは決してない。私たちは十分に以下の点を弁えている。『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』の標題が付いた学問成果はトマスなしにはそもそもあり得なかった。ズナニエツキ自身そのことを最も良く承知していた。彼は幾度もこの卓越したアメリカの社会学者の学識，知的才能，ならびに組織上の功績を表明している。けれども，私たちは次の事柄も見過してはならないだろう。ズナニエツキなしにポーランド農民に関する著作はこのような形態，即ち，学問上の専門科目としての社会学の理論上―方法論上の発展の中で画期的意義をもつ，モノグラフィになったという形態をとらなかったであろうということである。

このような見解は，現在，愈々アメリカの社会学者たちの間で普及しつつある。ここで私は，最後に，アメリカの社会学者ビアステッド（Robert Bierstedt）が1960年５月17日にミュンヘン大学において行った講演の一部を引用したい。―「よしんば二人の著者の経歴が本書の完結後異なって経過したとしても，またよしんば両者がきわめて―理論的問題ばかりでなく，気質においても異なっていたとしても，だれもが両者の共同研究はまさしくこの違いの故に，比類ないほどに能産的であったのだと判断することができる。一連の事情全体をもとに，両方の学者の後継者や学生の諸君は，後年になって自分たちの主人のために極端な誇張した主張を掲げようとしている。けれども私の思うには，二人をよく知っているものとして―トマスをハーバード時代から，そしてズナニエツキをイリノイ時代から知っているものとして発言するが，―二人のどちらも決して独りだけでは『ポーランドの農民』の著作がこのような成果をもって飾ることはできなかったこと，彼らのどちらも独り歩きでは，本書が今日一般に思われているような社会学の古典的作品とはならなかったこと，これは今日疑いのないことである。（ビアステッド報告講演のテキストは，ヘレン・ロパタ女史の文書記録集（シカゴ）のなかにある）。

註１．資料「フロリアン・ズナニエツキ叢書」に収められた論文（19編）の著者と論文題目を以下に挙げる

1．Florian Znaniecki “Aufgaben der philosophischen Synthese” (独訳 Fr. Griese)
2．Florian Znanieki “Denken und Wirklichkeit” (独訳 Fr. Griese)
3．Richard Grathoff “Does Florian Znanieck’s ‘Theory of System’ Conceive of Some “l’ordre du reel?”
4．Forschungsbericht Florian Znaniecki 1987
5．Richard Grathoff “Soziologischer Kultur begriff und alltägliche Begriffs-kultur Zum Beispiel Florian Znaniecki
6．Zygmunt Dulczewski “Florian Znanieck ― Co-Author des Werkes “The Polish Peasant”
7．Stanslaw Kowalski “Gründung und Entwicklung der Universität Posen bis 1945”
8．Florian Znaniecki “Erfahrung und Reflexion”

(独訳 A. Zinserling)
9. Stanisław Brakowski “Philosophie und Soziologie in Florian Znaniecki’s Intellektulier Biographie”
10. Steven Vaitkaus “The Florian Znaniecki Archiv”
11. Richard Grathoff “Tiresias Revisited with Znaniecki: ODER: Können System unser Wissen von Zukünftigem sichern?”
12. Marek Czyzewski & Alcja Rokuszewska-Pawelek “An Analysis of the Autobiography of Rudolf Höss”
13. Stansław Kowalski (Posnan) “Summeri um von Florian Znanicki’s Untergang der westlichen Zivilisation: Ein Entwurf an der Grenze von Kulturphilosophie und Soziologie” (original nur polnish Posnan 1920)
14. Vatatim Notes taken by H. Z. Lopat Evan Ames Thomas. 1986. The Sociology of William I. Thomas in Relation to *the Polish Peasant,* Unpublished Dissertation. Dep. of History, The University of Iowa
15. Antonia Kłoskowska University of Warsaw, Cultural system as patterns and models of action in the theory of Florian Znaniecki
16. Tewiz Wocial, On Value: THE WORLD AS The SYSTEMS OF MEANING: The Paper prepared for an international symposium in Aplil 1987 in Bielefeld on “Florian Znaniecki and the Problem of an Intenational Foundation of System Analysis and Research in Migration
17. Rainer Prewo, System und Subjektivität in der Handlungstheorie Znanieckis
18. Zbignie Bokszanski “Identity,Biography and the System of Action — A Theory of F. Znaecki
19. Piotr Sztompka “Florian Znanieck’s Sociology: HUMANISTIC OR S CIENTIFIC?

註２．フロリアン・ズナニエツキの略歴を以下に示す。

1881年，Swiatniki,Poland に伝統的・愛国的・教養のある農村地主の家で生まれる。Czestochawa と Warsaw の高等学校で学ぶが，ナショナリストの運動に参加して放校処分をうけ，国外へ（当時ポーランドはロシア，ドイツ，オーストリー＝ハンガリー帝国に占領されていた）。チューリヒ，パリ，ジュネーブの各大学で学ぶ。ジュネーブで a M. A degree, 1909. Jagiellon Unviversity（Krakaw）で Ph.D 博士論文 *Problem of Values in Philosophy.* 大学での仕事が見つからず，A Director of the Polish Emigrants’ Protective Association となる。この仕事は，経済的国外移住，主としてアメリカ移住の巨大なプロセスを組織監督の任にあたったが，アメリカは20世紀初頭，大量の貧しい雇用されない農村人口にとって夢の国となっていた。1913年にトマスとの出会いがある。1918-1920『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』出版。1920年政治的に独立したポーランドに帰国，ポーランドの最初の社会学講座（ポズナン）に就任，ポーランド社会学研究所の開設並びにポーランド社会学雑誌 Polski Przeglad Socjologiczny を刊行。1932-34コロンビア大学客員正教授となる。以後1939年までこの称号は反復もちいられる。第二次世界大戦勃発，ポーランド帰国が足止めされる。1939-1958，イリノイ大学教授。58年没。―以上は資料19. Piotr Sztompka: Florian Znaniecki’s Sociology: Humanistic or Scientific?　から抜粋して要約した。

07.12.20初訳／08.10.30改訳